



ラグビー部の思い出

千歳医師会
しのめクリニック

熊木史幸

高校卒業後、35年ぶりに故郷である千歳市に帰郷し、4月より千歳市内に在宅支援診療所を開設いたしました。

在宅医療は、体力・気力勝負の一面があるため、敬遠されがちです。札幌南高校在学中は、千歳から札幌まで汽車通学をしていた私に体力があったわけではなく、大学時代に培われたといっても過言ではありません。

大学は一浪して防衛医大に進学しました。残念ながら、道内の優秀な国公立大からはお呼びが掛からず、たまたま模試代わりに受験したこの大学しか入れなかったのです。初めての道外居住で、心躍るものがありました。これが地獄の始まりでした。

6年間全寮制の母校は、授業はほぼ16:30には終わるため、17:00頃から約1時間は毎日たっぷり部活で汗を流しました。大学の授業で過酷な訓練をしていると考えている諸先生がいらっしゃるかもしれませんが、大学は時間の規律は厳しいものの、決して過酷な訓練をしているわけではありません。部活でみっちり鍛え上げられるのです。ラグビー部であった私は毎日ダッシュやコンタクトプレーに明け暮れており、1時間でも体力の限界に達しておりました。またスクラム練習では「おい熊木、お前の力はそんなもんか?」と先輩から叱咤・叱咤・叱咤され、半泣きになりながら、スクラムマシーンを押していたことが何度もありました。

そんな部活に入らなかつたら良かったのですが、入学時の同室の先輩が怖くて入部を断れなかったのです。大きな岩山のような方でした。また北海道出身で4年上のI先輩に「お前、入部するよな?」と勧誘を受けた際は、もはや「はい」としか言えませんでした。新入生の頃の私にとって、部活問題は死活問題であり、ラグビー部退部=退学=二浪となってしまうため、続けざるを得なかったのです。そのため、同じような境遇の同期と夜ボール磨きをしながら、よく慰め合っていました。

当時はバブルの真っただ中で、合コン等で楽しんでいた同級生も多かったのですが、当ラグビー部は「バンカラ」集団で、平日の夕方、土曜日の午後はたっぷり練習をして、日曜日には試合というのが一週間のスケジュールとなっており、お遊びとは無縁の6年間を過ごしました。

お酒の機会といえば、年に4回あるという宴会が悪しき思い出で、芸をして、酒を飲んで、潰れるのが下級生の仕事という、今では極めて理不尽な「かわいがられ」を経験しており、OBの先輩に喜んでいただける芸を考へることが、試験勉強よりも優先?するほど、頭を悩ませておりました。そして高学年の頃は、急性アルコール中毒患者介抱の達人となっておりました。

部員には高校からの経験者はほぼおらず、ひたすら根性練習をしていましたが、その甲斐あって、試合ではスクラムをほとんど押されませんでした。その後徐々にラグビーが楽しくなり、無事卒業し、OBとなることができました。

卒業後は陸上自衛隊医官として、20数年間勤務いたしました。医官業務は、病院勤務から医務室勤務、行政職、教育職と非常に多彩で、外科専攻であった私は手術から水虫治療まで何でもやりました。平成5年には半年間のカンボジアPKO活動にも参加し、海外隊員のマラリア診断や感染症治療等も経験いたしました。教育職期間は、後輩医官の戦傷病診断・治療や救急救命士に対する観察能力向上を指導目標に勤務いたしました。こうして、いろいろなことを経験できたのも、多少の負荷がかかっても何とか解決できる体力と気力が学生時代に身に付いたからだと思っています。

自衛隊医官の定年は60歳で、いずれにしても就職活動をしなければならないため、50歳前に退職し、以前より挑戦してみたかった地域医療と在宅医療の道に足を踏み入れました。在宅医療は待ち受けではなく、拠点から出陣して治療するという面においては自衛隊医療と非常によく似ており、車を運転しながら充実した毎日を送っています。とはいえ、在宅医療を待ち望んでいる患者・家族は非常にたくさんいらっしゃいます。自分の力は微々たるものですが、こうした方々に少しでも元気をお届けすべく、粉骨砕身日々邁進していく所存です。

現在、53歳。医者としてはまだまだヒヨッコですが、これからも夜討ち朝駆けの生活を続けていけるように体力・気力を維持していきたいと思ひます。今の自分があるのは、入学当時あんなに辞めたいと思っていたラグビーがあったからだとは大変感謝していますが、ちょっとめげそうになった時には、「おい熊木、お前の力はそんなもんか?」という怖い先輩の言葉を思い出して、自身にムチを打っています。